
夏空サイダー

秋元愛羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏空サイダー

【Nコード】

N0092N

【作者名】

秋元愛羅

【あらすじ】

友達にも言えない秘密の片思いは夏のように輝いていてサイダーのように甘い恋を引き寄せた。

はじまり

それは夏空のように輝いていてサイダーのように甘い恋でした。

ミン、ミン、ミン

その日は暑さが残る秋のことでした。

と、・・・・・・・・・・届かない。

そのとき私は委員会の仕事で本を元の位置に戻すのに苦戦していま

した。

もう少し身長伸びてくれないかなあ。んっど……あとちょっと……

カタッ

えっ

私の頭上には私の手ではない手。

誰？そう思って振り返ると優しい笑顔で『大丈夫？』と囁いた彼がいた。

ドクン、心臓が動きました。

恋をして

あれから彼に恋してもうすぐ一年。

ただ遠くから見ているだけの一年。

何度も諦めようとしても諦め切れなかった一年。

苦しくてつらくてそれでも彼を見ると幸せな気持ちになる一年だった。

「ちょっと、輝晴。きーはーる。聞いてる？」

あ、そ、そうだった。今現代文の時間。集中しないと。

「ご、ごめん、みさちゃん。聞いてなかった……………」

「たくつ。主人公が……………」

ごめんね、みさちゃん。

私は彼が好きということを誰にも相談が出来ない。

彼のことは女子内では賛否両論。

私の周りではあまり好きではないほうだ。

特に親友であるみさちゃんたちはそのことを公言している。

もし彼のことが好きだといふときは恋をとったときである。

まあ、それはないだろうが。

私は堂本輝晴。そこら辺にいる平凡の恋する女子高生の一人。

そしてさつきから話題に出ている“彼”というのは安斉空汰くんという男子生徒。

彼は成績優秀でスポーツ万能なこの学校の生徒会長。

容姿端麗で雰囲気はどこか冷たい感じのする大人っぽい雲の上の人。

平凡と天才。

私と彼が似合わないということは分かっている。

彼の隣に似合う人はたくさんいるということも。

けど諦めきれないのはやっぱり“好き”だから。

星空への招待状

ガラガラ

「あら、今日は輝晴ちゃんが一番ね」

「橋本先生、こんにちわ」

橋本先生はこの学校の司書さん。

高校に入学してからずっと図書委員で図書室に通っているからもう顔見知り。

まあ、来る人が少ないからっていうこともあるだろうけど。

さて、今日は何読もうかな。

そつえばもうすぐ流星群が流れるってニュースでやってたから星の神話でも読もうかな。

私はそんな感じで今日読む本を決めた。

それから何分たっただろうか。

「星好きなの？」

突然声をかけられた。先生ではない低い声。だけど大人の声ではない。

今、部活中ということもあるがここに来る男子生徒はあまりいない。

いたとしても大半が三年生。

一体誰？

そう思い顔を上げた。

・・・・・・・・・・・・・・・・え？

そこには何故か彼の顔があった。

「僕のこと分かるよね？現生徒会長だし、同じ学年みたいだし」

ええ、分かりますとも。この学校で知らない人なんていませんから。
いるとしたら経って日もない転校生ぐらいでしょうから。

「あ、安斉君」

震えながらも出した声はとても弱弱しかった。

それもそうだ。

彼との接点はある夏の終わりしかないのだから。

しかも彼が覚えているとは限らないほどほんの些細の出来事だったし。

それなのになぜ？

弱弱しい声だったのに聞き取ってくれていたみたいで彼はほっとしたような表情を見せた。

遠くから見つめていた彼のしぐさを見てドキッと心臓がはねる。

し、静まれ、静まれ。

せっかく安斉君が話しかけてくれたんだ。答えなきゃ。

「あ、あの」

「ん？」

「星……好きです」

………撃沈。

男子と話すことがめつたにない私には荷が重たいようでした。

ああもう。穴があつたら入りたい！！！！！！

「ねえ、今度流星群が流れること知っているよね」

ええ、それで星の神話を読みましたから。

コクリとうなずく。

「それを今度科学部が観測しようとしてるんだけど一緒に見に行かない？」

………へ？

びっくりしてうつむいていた顔を上げた。

「嫌だったらいいよ。でも面白そうじゃない？」

「い、行きたい」

だって生で観測できるんですよ。望遠鏡、私持っていないし。

それし安斉君のお誘いだもん。行かないわけないよ。

——こうして私は安斉君とともに星を見に行くことになった。

ついに星空へ

それから一週間後。待ちに待った流星群が流れる日がやってきた。

「こんばんわ、堂本さん」

「こんばんわ、安斉君」

実はみさちゃん達も誘ったのだがそれぞれ用事があったので一人で行くはずだった、が。

そのことを安斉君に話すと意外にも安斉君の通学路と私の通学路が途中から一緒のことを知り、待ち合わせしていくことになったのだ。

凄く凄く嬉しいのだが・・・・・・・・・・・・・・・・私には大変なことだ。

さっきから緊張して受け答えが出来なくなっている。

その前に嘔みすぎでしょう、私。

それからようやく学校に着いた。なんだかいつもと同じ距離なのに
どっと疲れた気分。

よく見るとちらほら望遠鏡を覗いている人がいる。早く見てみたい
なあ。

そう思っているところに安斉君の名前を呼んでこっちにかけてくる
人が。

・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？陸君だよな？

「よお、空汰。来てくれたのかって・・・・・・・・・・輝晴？！
何でここに。というか知り合いなのか」

うーん、知り合いといふかなんと言つか……まあ誘われてきましたとしか言えないんですが。

「こいつと知り合いなの？」

こいつというのは陸君でしょうか？

言葉が一瞬雑になったのを疑問に思いつつ答えようとした。そう、
ようとしたんだ。

先に陸君に言われてしまつて口が開いたまま声が出せなかった。

陸君………伊藤陸は私が小学校から同じ学校に通つて約1
年の唯一の男友達だ。

と言つても言葉は交わすことなんてあまりない。

もしかしたら彼にとっては知り合いの部類に入るのかもしれない。

それでも彼は昔から優しくて。あの時はとても助けられた恩人である。

だから唯一下の名前で普通にしゃべれる友達。

「で、陸。僕たちの場所はどこ？」

僕たちの……場所？

「大丈夫、ばつちりとつてある」

「ど、どういうこと？」

「うん？ああ、輝晴は知らないか。学校の望遠鏡あまりないから早いもん勝ちなんだよ。」

だから一番早く取って設置した。

結構みんなから離れてるからうるせえ奴らも来ないし。

ま、来ることお前が伏せたから女子は少なくて居てもほぼカップルで動いてる」

ロマンチックだもんね。いいなあ。私もいつかそういう時期が来ればいいなあ。

「じゃあ、行こうか」

彼の合図と共に彼らの背を追って私はついて行くのだった。

星空の下で受け取った願い

彼らの背中を見つめながら歩く。

そこにはひとつ、ぼつんのある望遠鏡。

周りには人が居なくてなんだが寂しそうに見えた。

「あと、30分ぐらいかな」

「結構、早めに来たんだね」

「うん、陸が寝坊して遅れたりしたら見れなかったしね」

「もしかして俺って信用されてなかった、とか？」

「うん、昔っから」

うつそ~~~~~と嘆く陸君に「そだよ」という安斉君。

なんだかそのやりとりがおもしろくってついつい笑ってしまった。

それからしばらくして私たちは別々のことを始めた。

「輝晴は空汰とどこで出会ったの？」

「へっ?!」

びっくりした。

今は地面の上で座りながら望遠鏡を眺めている安斉君を見ていた。

陸君が急に声をかけてきたことにもびっくりしたのだが気づいたら隣に座っていたことにもびっくりした。

しかも出会ったって……………

「えっと先日、図書室で本読んでたら『星好きなの?』って聞かれて」

「それで……………出会ったのと同時に誘われたと言うわけか」

「その前に去年の夏の終わりに助けてもらったんだけど覚えてるか
どうか分らないや」

「そっか」

うつっ心臓が止まらない。

「そんじゃあ……右手だしてみい」

いきなり何だろうっと思って右手をだす。

安斉君も気になってか覗いてきた。

そして右手首に何かを巻きつけて両端を結んだ。

なんでしょうか………

じっくり見てみると織ってある。

「ミサंगा、だね」

「ミサंगा？」

それっと思いつながら結んで切れると叶うっというあれですか？

どうして………っというか私がつけていいのか？

そう聞こうとしたら、

「輝晴、俺の願い叶えてくれよ」

と言って誤魔化されてしまった。

でもさっきの彼の目は真剣だった。

私に託した陸君の願いは何
？

不穏なウワサ

あれから流星群を見たあと学校で陸君と別れ、安斉君に家の前まで送っていつてもらった。

彼と過ごす時間が長くなったため陸君ぐらいではないがちゃんとしゃべれるようになった。

そして遠くから見ていた彼が少し近くに感じて。

そしてまた・・・・・・・・・・・・・・・・・・彼を好きになった。

それから毎日のように帰りは図書室で本のことや勉強のことなどを話した。

たまに陸君が部活をサボってやって3人でしゃべったり。

もちろんほかの人もいたので話している声は小さくして。

彼はちょうど本棚に隠れる位置にある机をいつも使っていた。

その場所はどうしても奥に行かないと分からない場所で。

彼にとっては特等席のようなものだった。

それと橋本先生の『今日は』の“は”の意味もこのとき分かった。

私よりも早く安斉君がいつも来ていたらしい。

（実際は私が本に集中していて周りに気づかなかったためで、何度も私の後ろを通っていたらしく、この話を聞いて恥ずかしくなった）

——それからまもなくして小さな不穏な空気が近づいていた。

ある日私が聞いた新しい噂。

それは小さなウワサ。

“ドウモトキハルとアンザイソラタはツキアッテイル”

安斉君のことが好きな女子なら誰でも嬉しいウワサだが実際は、やばい。

まだごく少人数でしか彼と私の接点を知らない人が多いため信じられることはないと思うがこれが広まるとただでは済まされなくなる。

ただ安斉君に迷惑をかけるだけではない。

もし接点があつて好きだということ知られたら私は・・・・・・・・

だけどそれは私の予想よりも早く消えてなくなった。

噂は75日と言っけれど1ヶ月もたたないうちに消えてしまった。

そのとき私は正直ほつとした。これで今まで通りだ。

私は安斉君が好きなことは誰にもばれてない。

今までどおりの生活。

私の生活を脅かすものはない。

そう、思っていたのに……………
……………

どうして今頃になってあなたが目の前にアラワレルノ・・・
・・・？

正反対の少女

これは昔の記憶。それでも鮮明に思い出されるのは彼女は私の中で一番大切だったから。

『輝晴ちゃん』

そう呼んでくれたころ、私はまだ幼かった。

「お久しぶり、堂本さん。それとも昔みたいに輝晴ちゃんとも呼んだほうがいい？」

「お久しぶり、新川さん」

新川 柚茄

彼女は陸君と同じく小学校から同じ学校である人だ。

そして私にとって・・・・・・・・元親友。

彼女との出会いはごく普通。

同じクラスで席が近かったから。

だけど人見知りが激しい私にとっては彼女は憧れで尊敬してて信頼していた。

そんな彼女と元親友となってしまったのはかれこれ6年前のこと。

いや私が気づいていないだけでもしかしたらもつと前から彼女にとって元親友になっていたかもしれない。

それは小さなきっかけだった。

そう、私は彼女をいつものとおり呼んだのだ。友達の前にいる彼女を。

なのに無視された。

そして彼女はその友達とそのまま教室を出て行った。

——そのあと彼女は謝ってくれていたがそのときの目はめんどくさそうだったのを忘れられなかった。

それからも無視をされ続けしまいには一発

『あんたウザイ』

つと言われた。

そのとき私は彼女をただただ見つめるのとしか出来なかった。

それから当然のごとく中学では疎遠になった。

小学校からの友達は彼女とまったく逆で私が放心状態のとき助けてくれた人たちだった。

そしてまた同じく陸君も。

いや彼の場合その友達よりもっと私を助けてくれた。

真っ先に手を差し伸べてくれた。

すごく感謝している。

まあそれは置いてなぜ彼女がいまさらになって目の前にやってきたのか、それだけが知りたい。

中学に入り疎遠になってしまったため彼女に関する情報はすべて悪い噂ばかりだった。

それがすべてか、一部か、ぜんぜん違うのかは私には分からないが彼女の姿を見たなら悪い噂しか流れないのもうなずけるだろう。

黄土色に近いような髪。染めてあるためか見ただけで髪が痛んでいるのが分かる。

校則違反でそこまであげなくてもと言うほど短いスカート。

襟元は止められていなくて下に来ている服が見えてしまっている。

完璧なギャル。

私だったらもっとうまくごまかすのに。

そう考えている時点で私は終わっているのかもしれない。

「まああんとと昔話しに来たわけじゃないから。ついでにあんととよりを戻す気もない」

よりを戻すってもうないことでしょ？

知ってるよ、あなたが噂流してたの。今はどうか知らないけど。

「私に安斉空汰を紹介して」

・・・・・・・・・・・・・・・・はい？

引き金

一瞬、何を言われたのかさっぱりだった。

「ワタシにアンザイソラタをショウカイして」

この言葉から推測すると彼女は私が彼と友達であることを知っているように聞こえる。いや、彼女の汚い笑みからして確実に知っている。

そこはどうでもいい。

ただ問題なのが何故彼女は知っているのかということ。

彼と私の接点は陸君しか知らない。

だからって陸君が例え頼まれたって教えるはずはない。

じゃあ何故？

一応ない頭で考えてみた。

彼女はこの学校の別の学科にいるため普段は会わないし、普通科とも接点は殆どない。なので彼と会う可能もないだろう。

その前に図書室以外で彼と話したことがない。だからこそあの噂は信憑性に欠けすぐに消えたじゃないか。

でも、会えるとしたら部活のマナージャーとして入ること。これなら接点が出る。でも大抵生徒会とかで遅れると言って途中参加ばかり、らしい。

そこで私のことを聞いて（聞こえて）きたのか？

いや、そうなると私に頼む必要性はない。

彼は普段は近づけない雰囲気は持っているもののいい人だから話しかければ普通に答えてくれる。

やっぱり出てこない。

「何故知ってるのか分からないって顔してるまあ、減るもんじゃないし教えてあげる」

増えるもんでもないよね？

ついでにその説明いらないと思う。

「あんたのクラスに中野っっているでしょう？そこまでかつこよくないやつ。」

あれ、私の一応彼氏」

へえーそうなんですか。かわいそう中野君。

「あれにお願いしてあんたの尾行を頼んだのよ」

「は？」

まず、あんた（一応）彼氏に何させてんですか。

「そしたら話してる所を目撃したわけ」

「はあ、さようですか」

「証拠写真もここに」

「あつそ」

正直言つて疲れた。

くるりと背を向け図書室に行こうとした。

「ちょ、ちょっと。いいの？あんたの友達にばらしちゃって」

「ばらすつて別に話すぐらいで壊れる仲ではないし」

恋してることはばれちゃいけないけど。

ついでにいきなり面識のない人に『堂本さん、安斉君と付き合ってますよ』って言われても信憑性ないし。

ん？じゃあ最初の噂は誰が流したんだ？

「じゃあ、鈴木明菜には？」

まさかのその人出します？

私、彼女のことあんまり知らないんですが。

「そうしたらかなりの速さで広まるわよねえ」

もうどうでもよくなってきたんだけど。

その後あまりにもうるさいので『いつも図書室で本読んでるから自分で言ってくる』と一喝し帰った。

妨害

元親友という珍しい人と言葉を交わしてから1週間。

私彼と話さなくなった。

いや、話せなくなったというほうが正しいだろうか。

「輝晴、今日も挑みに行くのか？」

最近彼のことを心配して毎日来るようになってしまった陸君。

それにしても“挑む”ってないと思うよ。

まあ、彼が挑むという言葉を使うのにもわけがある。

ドアを静かに入り彼のいる机に近づく。

そこには読書をする彼、安斉君とその妨害をする元親友、新川柚茄。あまりにも彼女は迷惑と言つ言葉を知らなさ過ぎる。

彼女は私の言つた言葉どうり自分で会いに行つた。もちろん私のいないとき、紹介もなし。ここまではえらいと思う。

ただ、私の名前を使い、話しかけたところが問題だ。

あの時はまじでビビッた。

「陸……」

「よう、空汰」

それはあまりにもひしひし伝わるもので同情を越して哀れとしか言えない。

ついでに公害も起こしてくれる彼女なので大変なのだろう。

「私には？陸君」

甘つたるい声を出すこの女はあの日しゃべった女なのかと疑う。

むしろあんたは影で言われていないかと心配する。

そして小声で「うぜっ」という陸君に賛同する。

「輝晴ちゃんは読んでくの？」

後ろにはよ帰れというBGMが流れてきそうな声で言う。いや案外心の中で思ってるのかもしれない。ただそんなこといったら私が彼女とトモダチかと疑われてしまうことを恐れていえないだけだが。

「んゝゝゝ借りてだけでいいかなと思っている、新川さん」

私は私で完全に他人行儀で通してる。

普通昔いじめた人間を誰が手伝うかってんの。ほんとに彼女はウザイにこの上ない。

だからといって何かをするわけではない。主張は出来ない。

元親友だからこそ分かるのか、それは分からないがこいつに私は彼が好きなことは気づかれないほうがいいだろう。

話していただけなら言い訳も通じる。ただ“好き”なのは別だ。そんなの分かってる。

でも私は元親友の（たとえ嫌いだとしても）妨害をしてる時点で醜い女なのかもしれない。

彼と話したその日から欲張りになっていく私が一番憎い。

壁

高い高い壁があつた。

それはもしかしたら飛べる高さだつた。

なのに飛べなかつたのは私が弱虫だから。

「輝晴つて安斉君と仲いいの？」

「えっ？」

いきなりの質問にあせつた。

美里ちゃんたちが図書館に来ることはない。

だから彼と一緒にいるところは見られていないはずだ。

「ほら、流星群が流れる日に輝晴と安斉君がいるところを見たからさ」

そこか………

ここで否定するのはよくないと思う。また見られたときの言い訳も大変だ。

「うん、まあ」

「へえ………安斉がね」

ん？なんだか知ってる風だけど。

「私さあ安斉と一緒にの中学なんだけどあんまり人とつるまなかったんだよね。最近はやんとほかのやつもつるんでるみたいだけど」

そうなんだ。ちょっと嬉しいかも。

ん？あれ？

「嫌いじゃないの？」

「嫌いじゃないよ。苦手………というべきかな？たとえるならば話す話題が分からない人、かな」

なんだ、嫌いじゃなかったのか。何やってたんだろ、私。

「で、いつも気になってたんだけど、そのミサंगाに何を願っていたの？」

「あ、これね、陸君がつけてくれたの」

「ふん」

何か言いたげな表情の美里ちゃんだったが何も言わなかった。

で、今日も“挑み”中。

「なあ、輝晴。もうそろそろ……殴り飛ばしてもいいか？」

「さすがにそれは……」

「この公害女を本気でどうにかしたい」

確かに陸君の言う通り歩く公害女をどうにかしたい。

その公害のせいでこのところ図書室の利用者が少ない。

今日は私たちだけだ。

「ねえ、陸君と輝晴ちゃんは付き合ってたのぉ？」

いきなりこつちに向いて甘ったるい声で吐いたのはそんな言葉。

「付き合ってたねえよ」

いらつときたのか陸君はいつもより低い声で答えた。

「でも仲良さそうだし・・・・・・・・・・・・・・・・小学校のころ、好きだったんだよね？」

「はぁ？」

つい反応してしまった。だけどそんなはずはない。陸君は友達でそれ以上もそれ以下もない。

だけど肝心の陸君は苦虫を潰したような顔をした。

どういう、こと？

キミノセイ

人には知っていい真実と知らなくていい真実がある。

私は今、そのパンドラの箱を開けてしまったのかもしれない。

願わくば、何もなかったころの私たちに戻りたい。

“ 付き合ってるの？ ”

空気も読めない公害女によって雰囲気が一気に変わり私たちの周りにはなんともいえない空気が流れた。

ガッタン

安斉君が席を立った。

「おい、空汰」

陸君の言葉を見無視してそのまま図書室を出て行ってしまった。

そして公害女も不敵な笑みを見せてあとに続くように出て行ってしまった。

私たちの周りに流れるのはなんともいえない重い空気だった。

「輝晴」

さっきのころもあり声をかけられ緊張した。

「輝晴、言いたいこと、あるでしょ」

「あれ、本当………?」

「……うん。本当」

目の前が真っ白になっていく気がした。

「俺は小学校のころから輝晴のこと好きだよ」

「うそだあ」

「うそじゃない。そのミサングもそのため」

「え・・・・・・・・」

まさかこのミサングにそんな願いがあるとは思わなかった。

「あれが輝晴をいじめたのも、俺のせいだ」

「えっ？」

「あいつに告白された。それで好きな人、輝晴のことが好きだと伝えたら次の日には」

いじめを開始した

いや、まさかとは思った。

でも陸君がうそをつくはずがない。

これは真実である。

でも・・・・・・・・・・・・・・・・

「私を助けたりしたのは罪滅ぼしつもりだったの？」

目から一筋の涙が流れた。

友達だと思っていた。唯一の男友達として。

なのにそれは違った。

私は陸君にとって・・・・・・・・

「ごめんね」

「いやいい。むしろ謝るのは俺だ」

「ごめんね」

「もう謝るな。もう過去のことだし、な？」

「ごめんね」

「ごめんね、陸君。」

迷惑かけちゃって。

君思ふ

こんなにもつらいなら忘れてしまえばいいのに。

それが出来ないのは好きになった頃よりも、君を見つめているだけだったときよりも、好きになっていたから。

もう叶わない・・・・・・・・・・私の初恋。

あれから私は図書室に行くことはなくなった。

あれ以来、陸君と話すことが怖くなったのだ。

“好き”と告白されたからではなくただ、私といることが好きという感情だけではなくごめんという感情が入っていたからだ。

私は陸君が気にすることではないと思う。

もし陸君が言わなかったとしてもいじめは始まっていたと思うから。

ただ、普通に接することが出来るのか心配なだけ。

もしかしたらまたごめんと言いそうになってしまつから。

それと彼、安斉君はヒートアップした公害女の餌食になっていた。

彼とはすれ違ふときに会うけれどすぐに見つかって話しかけることすら出来ない。

あまりにも見つけるのが早くて見ている私のほうが顔を引きずつて
そうだ。

そしてまた話しかけられる前に戻ってしまった。

人魚姫の逃亡

一瞬、目を疑いたくなった。

珍しく私は図書館に来ていた。

実を言うと借りっぱなしの本があった。

それを返しに来たのだ。

うん、大丈夫。すぐに帰れば気づかれない。

「輝晴」

……早くも気づかれたそうです。

「お、お久しぶりです陸君」

「おう、元気か？」

「うん」

なんかほっとした。いつもの、いつもの陸君で。

「輝晴は返しに来たみたいだな」

「うん。返しそびれた」

「てかまず、中に入るか」

そういつて入ろうと扉を開けた。

・・・・・・何が起こってますか？

私は一旦扉を閉じた。

「陸君、これは夢でしょうか？」

「さあ？輝晴、大丈夫か？」

「だ、大丈夫じゃなかったら閉めてませんよ」

「開けるか」

「うん」

「「いっせせのせ」」

ガラッ

やっぱりそこにはもう一回キスしている安斉君と・・・・・・・・公害女で。

私は本を落としたのを気づかずに逃げ出した。

魔法使いにかけられた魔法

見つめているだけでいいと思った私に一言言いたい。

『大丈夫、一歩前に踏み出して』

走って走って走り続けて私は止まった。

ゼイゼイ言うことで現実と語る。

ああ、付き合っただ。頭の隅でワタシが悟る。

違うかもしれない。私と思う。

だけど、二度もやる人間なんて恋人以外存在しない。

ああ、諦めなきゃなあ。

本、落としてきちゃった。

そんなことを思いながら私は動く。

最後まで君の名を呼ぶことはなかった。

「輝晴」

グイッと引き寄せられたのは……………

「陸君」

「輝晴……………」

「ごめんね、取り乱して。ちょっとびっくりしたから。

本どっしよう。落としてきちゃったよね」

「輝晴」

「これからどうしようかな．．．．．

なんか会いにくいよね」

「輝晴！！今の自分の顔分かってる？」

「えっ？」

「泣いてるよ」

不思議に思いながら目を擦ると手に水滴が．．．．．

「アハハ、何泣いてるんだろ」

「輝晴は空汰のこと好きだった？」

「友達としてなら」

「うそ、泣いてるのが証拠」

「泣いてないよ。ほら、走ったから」

「走ったりしたからって目が赤くならない」

「違うよ」

「輝晴」

どうしてやさしいんだろう。陸君は。

やさしいから甘えたくなる。

やさしいから、君の気持ちを知っている私には肯定できない。

急にふつと頭をなでられた。

「輝晴は自分の気持ちを言うことを我慢すぎるんだよ。

空汰が好きっていいない理由も知ってた。

でも輝晴は諦めることはしなかった。

だから言ってもいいんだよ、好きって」

ね？輝晴言つてごらん。そう付け加える陸君が大人に見えた。

「陸君、訂正をお願いします。

諦めることはしなかったではなく諦められなかったが正解です。

それから……私は安斉君のことが好きです」

笑えたのか分からない。でも精一杯の言葉をつなげた気持ちだ。

そして陸君も苦しそうな、悲しそうなでも安心した表情で。

「まだ空汰は図書室にいるみたいだからその言葉を言っておいで」

「ええ?!」

「ほづら、急げ輝晴」

「えっ、えっ」

「振られたら俺のところ来い。輝晴を笑わせる自信はあるから」

「う、うん?」

トン、私は軽く押された瞬間走り出していた。

目指すは彼の元へ。

「ミサンの願いは叶ったみたいだな」

そう呟く一人の男の真意は誰も知らない。

震える鼓動抱きしめて

震える鼓動。

震える唇。

本当に伝えたい言葉を口に出すのは一番難しい。

ドクン、ドクン。

心臓がゆっくり動いてる感じがする。

半分勢いでやって来た私。もちろん告白なんてしたことがない。

伝えたいこと伝えといて陸君の下へ逃げてしまおう。

心の中でそう決めていざ、出発。

ガラッ

なんでいつもタイミングの悪いときに会ってしまっんでしょうか。

「堂本さん」

「安斉君」

ああ、逃げてしまいたい。どうしてこんなかたちでいつも出会っ
てしょう。

「裏庭行こうか」

「へ？」

「ここだと邪魔だしね」

そう言って少し体をずらすと注目されてる……………
・

「そうしましょう」

ゆっくりとベンチに座る。

グラウンドから部活のかけ声しか聞こえないほどここだけ殺風景に感じられる。

放課後ということやもうすぐ終了時刻ということもあってか人が通る気配すらしない。

なぜ彼がこんなところに連れてきたのは分からないが何か事情があることが感じられる。

「あのさあ」

「はいっ」

告白しようとしてきた私には耐え難い緊張感だった。

「あの女とは関係ないからね」

「……………ごめんなさい。よく意味が分からないです。」

「堂本さんの偽友のこと。名前聞いてなかったから」

そ、そうなんですか。って関係ないってどういうこと？

「一回目は事故。これに関しては僕も悪いところがあるからなんともいえないけど二回目は調子に乗ったあの女がやってきただけ」

ということとは……………

「カレカノという関係ではないと言ったことでしょうか？」

「うん、そういうこと」

はあ、恋人じゃなかったんだ。

なんか安心。って付き合ってるわけではないから関係ないんだけどね。

「で、堂本さんはどうしたの？」

「へえっ?!」

「なんか息上がりながらやってきてたみたいだから」

「えっと・・・・・・・・・・」

告白するときって雰囲気大事にするものですよね？

こんなんで人生初の告白してもいいんでしょうか？

「あっと・・・・・・・・その・・・・・・・・」

「ゆっくりでいいよ。流星群のときに話したときもテンパッてたし」

「あの・・・・・・・・」

こゝ言葉が出てこない。

一言、しかも二文字なのに言えない・・・・・・・・

それから何も言えず沈黙が続いた。

「もうそろそろ、帰ろうか」

「えっ」

「明日、言えたら教えて？」

「あつの」

「なら紙に書いても・・・・・・・・」

そついいながら荷物を取りに行こうと遠ざかっていく安斉君。

明日でもいいんじゃないか。

そつ思つ自分がある。でも、ここで伝えなかったらそのままずっと甘えてしまつような気がする。

私は・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・つき」

「えっ？」

「好き、安斉君のことが・・・・・・・・好き」

のどにつつかえながら出てきた私の気持ち。

おそろおそろ彼を見ると・・・・・・・・目を見開いて立っていた。

夏空サイダー

シュワツとする瞬間弾ける甘いもの。ゴクリと飲めば夏の空のようなスツキリさ。

夏空サイダー

飲まなければ分からない不思議なサイダー。

さあ、君も一口飲もうじゃないか。

固まっている彼に対して私はどういう反応をすればいいのか分からない。

確かに固まる原因を作ったのは私だがこんな反応されるとは思っていなかった。

むしろ好きだが私の言っている好きと彼の思っている好きとはぜんぜん違うと言うことを彼の口から利かされるとばかり思っていた。

のに、これはどういう意味でしょうか？

「僕にも好きな子がいてね」

「えっ」

「その子のこと知リたかつたんだけどなかなか声をかけられなくてね」

好きな子が安齊君もいたことはショックだけどやってることは私と同じで共感できる。

「一年過ぎて諦めようかなあつとしたけど出来なくてね。」

そんなときその子が星の神話を読んでたんだ」

ん？

「ちょうど前に陸から行ってみないかと誘われてたことがあったから誘ったらOKもらったんだ」

えっと・・・・・・・・これは。

私のうぬぼれでしょうか？

「うん、諦めなくてよかった。輝晴、好きだよ」

一目惚れから始まった二年越しの片思いはこうして終わりを告げた。

『大丈夫？』

『あ、ありがとう』

背の小さい彼女は笑った。

ドックン

えっ？あれ？

END

夏空サイダー（後書き）

や、やっと終わった！！！！実はこの作品は10話で8月中に終わる予定でしたがあれよあれよで9月下旬。しかも予定より話数多い。まあなんだかねで読んでくださった読者様、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0092n/>

夏空サイダー

2010年10月13日04時35分発行